

自然災害から学び、日本人は成長してきた

シリーズ「国土教育」



長陽大橋ルート開通を喜びテープカットする地元の人たち(2017年8月27日)

厳冬期前に開通した俵山トンネルルート (2016年12月24日)



地震、津波、火山噴火、洪水、土砂崩れなど自然災害が頻発する国土の上で日本人は暮らしています。ここ7年を振り返っただけで、平成23年東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)／同年台風12号(紀伊半島豪雨)／24年7月九州北部豪雨／26年8月豪雨(広島市の大規模土砂災害)／同年御嶽山噴火／27年9月関東・東北豪雨(鬼怒川の堤防決壊)／28年4月熊本地震／29年7月九州北部豪雨など、大規模な自然災害が頻発しています。また、近年は毎冬のように強烈な寒波が到来し、日本列島各地が記録的な大雪に見舞われ、交通麻痺やライフラインの切断など、甚大な被害が発生しています。

熊本地震から2年

熊本地震は、熊本・阿蘇周辺地域に甚大な被害を与えました。多数の家屋倒壊や土砂災害による人的被害、電気・

ガス・水道などライフラインへの被害のほか、空港・道路・鉄道などの交通インフラにも甚大な被害が生じ、県民生活や地域の経済活動にも大きな影響を与えました。

主要幹線道路では南北方向の大動脈・九州縦貫自動車道が、2週間にわたり全面通行止めになりました。東西方向の生命線である国道57号が南阿蘇村立野で斜面崩壊により寸断、接続する国道325号阿蘇大橋も崩落し、県道28号熊本高森線の俵山トンネルとそれに繋がる橋梁群も損傷、1日2〜3万台を超える熊本・阿蘇間の重交通が機能麻痺となりました。国道57号と325号は、現在も通行止めが続いています。

幹線道路ネットワークの重要性
熊本地震では多重性(リダンダンシー)のある幹線道路ネットワークの必要性を痛感

一方、熊本地震による幹線道路網の長期通行止めと、厳冬期前に開通した俵山トンネルルートの開通(2016年12月24日)は、南阿蘇地域の道路利用者にとって、広域的な道路利用者に道を改めて認識してもらう契機になりました。同トンネルルートの開通式では、南阿蘇村の住民が手作りの旗を振り、工事関係者に感謝の気持ちを伝えてくれました。

長陽大橋ルートの開通(17年8月27日)は、分断された南阿蘇村の中心部と立野地区を直接つなげ、通勤通学や通院など村民生活の利便性を大幅に改善しました。村唯一の救急指定病院・阿蘇立野病院は、外来診療に加え9月末から入院診療を再開。地域外で

脆弱な国土の上で暮らす日本人

自然災害から学び日本人は成長してきた

避難生活が続いた同村立野の長期避難(357世帯)も、同大橋ルート開通を機に10月末に解除され、マスコミ各社は「希望の架け橋」と大きく報じました。

日本人はイギリス、フランス、ドイツなどの国々と大きく異なる厳しい条件を備えた国土に働きかけ、安全で快適な生活環境を築いてきました。脆弱な国土の上で、何度も大きな自然災害に見舞われながら、そのたびに苦難を乗り越えてきました。自然災害からの復旧を糧として、日本人は成長してきたのです。

内村鑑三は著書『地人論』で次のように述べています。「地の目的はいかん。人類を発達せしむるにあり。人類の進歩、啓発を促すために、地はいかなる特質を有せざるべからずか。」

(一) 進歩を助けんがために、地は開拓、耕耘(こううん)、運輸、交際の便利を人類に供せざるべからず。



復旧に感謝する横断幕

は、地は多少の障害を人類に供せざるべからず。地の配列、構造にして全く完全ならず。すなわち、この地球は人の労力をもって初めて完全たるを得るものなり。」

日本人は列島で頻発する大規模自然災害によって、ずっと昔から教育を受けてきました。現代に生きる私たちは、先人の努力に思いを馳せ、国土への働きかけを続け、将来世代により良いインフラを引き継がねばなりません。

(国土学アナリスト 森田康夫)

であり、日本の死者数は民間人も含めて300万人といわれていますので、それを凌ぐ人口減に直面してゆきます。

情報科学の進展もあり、将来推計の人口は1平方キロメートル単位の区画で、しかも年齢階級別に予測値が「オープンデータ」として誰でもが入手できるようになっています。皆さんの住む身近な地域が近未来にどのような姿になっているかを、以前よりもリアルに想像を働かすことができるでしょう。

オープンデータを活用した立地やマーケティングも、AIを使った高度な分析ができるようになりました。道の駅も広義的には社会インフラの一つ。このようなオープンデータを活用しながら地域を「見える化」し、新たな「気づき」を得ることで、これから備えるべきことが何かを、自分達のコミュニティーの範囲で考えてみることも大切です。

点描

道の駅

国道愛好家 松波成行

橋梁といった社会インフラの維持・補修を考える上で、将来、その地域がどうなっているのかを、幾つかの「オープンデータ」を活用して、やや大袈裟な表現ですが「未来予想」について考える機会がありました。

人口推移や変化は、数ある統計指標の中でも最も確度の高い未来予測の指標といわれています。改めてではありますが、約20年後の2040年、日本の人口は今よりも約2000万人少ない社会になっていることは衝撃でした。単純に年間で約100万人の自然減。日本の有史で最も人口減となったのは第二次世界大戦(1937年~45年)